

金剛心の獲得とは？

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之

二〇一四年十一月二十七日（親鸞聖人讃仰講演会）の講話が真宗大谷派教学研究研究所発行「ともしび」二〇一五年五月号（第七五一号・二〇一五〔平成二十七年〕年五月一日）に収載された。それをこのたび、筆者が再訂してここに収載させていただきます。

はじめに

親鸞聖人の御和讃（天親菩薩）に、

信心すなわち一心なり 一心すなわち金剛心

金剛心は菩提心 この心すなわち他力なり

（『真宗聖典』四九一頁、東本願寺出版。以下、『聖典』と略称）とあります。この和讃などを手がかりに、あらためて『教行信証』「信卷」に取り上げられている金剛心についていただき直してみたいと思います。今回は「金剛心の獲得とは？」という講題を出させていただきましたが、まずそれについて少し述べたいと思います。

心ということについて思うと、私たちの心には煩惱の心が起りますし、事情によっていくらでも動きます。私たちはとめどなく迷いが起こる心を生きています。それにも

かわからず親鸞聖人は金剛に譬えられるような心について語っておられる。それは何を言おうとされたのだろうか、私にはそのような疑問があります。

あるいは『浄土論』にある「世尊我一心」の「一心」についても、金剛心であるとおっしゃっているけれども、この金剛という言葉については納得できないところがあります。動きゆく心のなかに阿弥陀如来に帰依する心が起こらないわけではないのですが、反逆的な心ともいいますか、自力の心がいつも起こってしまう。どうしてそのような心で「本願を信ずることが金剛心である」と言えるのだろうか、そのような疑念が私のなかですつと続いています。

また、菩提心についても同様です。確かに「堅超しちやうの菩提心」、つまり縦型の菩提心は起こすことは難しい。縦型の菩提心によって成仏することを信じてやり抜く心などはとても起こらない。それはよくわかります。しかし「横超ちやうの菩提心」、つまり横ざまに起こる菩提心とはどういうことなのか。これが私のなかではなかなかすんなりと落着しなかったのです。聖人の言われている言葉の意味だけならわかりますが、自分のこととして納得できないといま

すか、腑に落ちない。

そういうことがあつて「私の信心は金剛心です」などと言えるのだろうかという疑問もあるままに、「金剛心の獲得とは？」と講題に出してみようということで、今回の講題に疑問符が付けてあるのです。

金剛心

親鸞聖人が、金剛心ということを出されるのは、『教行信証』「信巻」の二河譬ふの解釈のところです。ご承知のよう二河譬とは、「人ありて西に向かいて行かんと欲す」〔聖典 二一九頁〕ということ、人が宗教的な実存となることを善導大師が「西に行く」と表現されていますが、西に向かおうとするとき、前に忽然そうぜんとして河が現れる。その河は南側が火の河で北側が水の河になっており、その真ん中に白道があるという譬ひ喩ゆです。この「白道」について善導大師は、

衆生の貪瞋煩惱の中に、よく清淨願往生の心を生ぜし

むるに喩うるなり。

〔聖典〕一三〇頁

金剛について

とされ、これに対して親鸞聖人は、

「能生清淨願、心」と言うは、金剛の真心を獲得するなり。
〔聖典〕一三五頁

と註釈されておられます。この後、さらに親鸞聖人は善導大師の「十四行偈」（『帰三宝偈、勸衆偈』）の文、

道俗時衆等、おのおの無上心を発せども、生死はなはだ厭いといがたく、仏法また欣ねがいがたし。共に金剛の志を發して、横しるに四流るを超断せよ。正しく金剛心を受け、一念に相応して後、果、涅槃を得ん者と云えり。抄要

（同上）

を引用されています。親鸞聖人がこの文を根拠にして押さえておられるということは、二河譬における「白道」を金剛心の譬喩だと押さえておられるということです。

そのように親鸞聖人は善導大師の金剛の言葉を引用なさっています。それは親鸞聖人がよほど金剛という言葉に何か問題を感じられたからであると思われます。親鸞聖人はこの「十四行偈」を引いた後さらに、「金剛」という言葉が出てくる文（『序分義』）を引かれて、その後にもう一度、

「金剛」と言うは、すなわちこれ無漏むろの体なり。

（同上）

という文（『定善義』）を引かれています。「金剛」は無漏の譬喩であるとおっしゃるわけです。有漏は煩惱があるというところで、無漏は煩惱がないということです。金剛とはダイヤモンドのことであり、そのダイヤモンドは炭素の結晶です。炭素は四つの手があるといわれていますが、ダイヤモンドは炭素の四つの手同士ががっちり組み合っており、

純粹無垢の結晶です。この世のなかでは唯一と言つてもいい純粹無垢の結晶、それがダイヤモンドです。

金剛心を発すとは

先ほどの善導大師の「十四行偈」の引文は親鸞聖人の抄要ですが、そこには「共に金剛の志を發して、横に四流を超斷せよ」とありました。この「共に金剛の志を發す」ということはどういうことなのでしょう。自分一人が菩提心を起こして「仏に成るのだ」と頑張るのではなく、「みんなと一緒に仲よくやりましょう」とお念仏する。そのように考えればわからないではないですが、親鸞聖人がそのようなことを言っているとは思えないのです。

この「共に金剛の志を發して」という言葉の前には、「各發無上心 生死甚難厭」とあつて、「無上菩提の心」を「おのおのが發す」場合には、「生死」の迷いを厭い捨てることはなはだ困難であり、仏法を欣うこともまた困難であると述べ、それを受けて「共に金剛の志を起こし」と続いて、「横に四流を超斷せよ」とあります。この四流

とは生老病死、あるいは欲暴・有暴・見暴・無明暴のことであると「信卷」では解釈されていますが、つまりこれは「金剛の志を起こすならば、横ざまに迷いのいのちを超斷する」ということです。言葉どおりこれは「横超の菩提心」を表しています。つまり金剛心を發すことの内容や利益とは「迷いのいのちを超えることが成り立つ」ということなのです。このことは善導大師の御和讃にも、

金剛堅固の信心の さだまるときをまちえてぞ

弥陀の心光撰護して ながく生死をへだてける

〔聖典〕四九六頁

とあつて、ここに「金剛堅固の信心」という言葉がありますが、この御和讃でいえば、「金剛堅固の信心のさだまるとき」、「生死をへだてける」ということが成り立つと言われているわけです。つまりそれは「弥陀の心光撰護」によつて「生死を超える」という事実が起こる」ということを表されているのです。

生死を超える時

しかし、私たちの日常意識で考えるならば、生死の迷いを超えるということなどありえない。この煩惱の身で、あるいは迷いが後から後から起こる心で、どうして生きている間に生死を超えるなどと言えるのでしょうか。生死を超えるのは死後であるという話のほうが単純明快です。しかし今生に本願力の利益で生死を超えるということがあると言わなければ、親鸞聖人の教えとは言えないのです。また別の善導大師の御和讃でも次のように述べられています。

煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば

すなわち穢身えんすてはてて 法性ほつしやうじやう常樂証じやうらくしやうせしむ

(同上)

ここでも親鸞聖人は「すなわち」という言葉を置いておられて、「死んでから」とは書いておられない。今生に「本願力に乗ず」るなら、「すなわち」生死を超えると言われ

るのです。

「生きているうちではなく死んでからです」と言っておけば、一応矛盾は消えます。しかし矛盾が消えるにしても、本願が衆生に与えようとする利益は、死後の利益ではないはずで、確かに第十九願では自力の心に呼びかけるために、臨終での来迎を説いています。しかしそれは自力の心ならば自力が止むまで、つまり死ぬまで待つしかないからです。第十八願では、「心を至し信樂しんがくして我が国に生まれんと欲おもうて、乃至乃至十念せん」(『聖典』二二二頁)と云われているのであり、本願の利益は信心にあるのだということなのです。それは死んでから浄土に行くことを言っている言葉ではないのです。人の宗教的要求に現実に応えようとする表現なのです。

私たちは、例えば第十八願成就文の「かの国に生まれんと願ねがすれば、すなわち往生を得え」(同上)ということについて「浄土を願ねがって念仏ねんぶつしていれば、きつと浄土に行くことができる」と解釈してしまっています。しかしそれはいわば願ねがっていたら、いずれ、その国に生まれることができるといふことです。しかし、成就文は「生まれんと願ねがう」

そのとき、「すなわち」「生まれることを得る」のであると言っているのです。この「すなわち」とは、時を隔てず日を隔てないということです。つまり時間を経てからその事実が起こるのではなく、今の即時の事実であるということです。今の一念以外に宗教的事実が衆生を助けるということとはない。それを「即得往生」と願成就文で言うのです。

この「欲生」あるいは「願生」ということについては、欲生心を人間が起こす心であるとすると、凡夫が起こす願いは、比喩的に言えば色眼鏡で見た欲でしかない。そして「願生」が人間の起こす意識上の願生ならば、つまり私たちが行きたい世界を願うということならば、私たちが夫が行きたいのは法蔵菩薩が誓っている世界ではない。私たちは本当のところ平等に一切の存在を撰取する世界などに行きたくない。私を大切にしてくれる世界、それぞれ自分を大切にしてくれる場所に行きたいのです。

しかしそれは親鸞の見方から言うなら、方便化身土です。しかしたとえ方便化身土であっても、ともかく今ある世界から翻ひるがされることを、法蔵菩薩は「悲願」として呼びかけておられるわけです。その呼びかけが、真実の如来の世

界に触れる機縁になるからです。しかしそれは法蔵菩薩の真の深いお心ではない。親鸞聖人は徹底して方便化身土を批判されて、「真実報土の往生を遂げるまで歩みなさい」と教えてくださっています。それは「真実報土には生きていくことは行くことはできない。死んでから行くのです」というようなことを言うためではないのです。

矛盾

先ほど「四流を超断する」ということが出てきましたが、『教行信証』『信卷』には横超断四流釈と言われる段があります。そこでは生死の迷いを横さまに超断することが述べられています。親鸞聖人が『教行信証』『信卷』においてそれを論ずるのは、本当の真実信心がもっている内容について明らかにするためです。そのために「四流を超断する」と親鸞聖人がおっしゃっているわけです。

ところが私たちは四流を超断するどころではない。私たちは四流に埋没しており、本当にどうしようもない迷没の凡夫なのです。阿弥陀さまが「そのままがいい」と言って

くださっていても、どうにもならない自力の心が起こって、もがき苦しみ悩んでいる。私たちの心はまさに生死の迷いの心なのです。

如来は私たちの存在の故郷として浄土を建てて、その世界へ「来なさい」と呼びかけておられます。これを「如来回向の欲生心」と親鸞は仰せられます。しかし私たちはその如来の「純粹無漏の世界へ来なさい」と言われていることが聞こえず、有漏の煩惱の濁世が好きなのです。煩惱の方が苦しいこともあるけれど楽しいとも思っているのです、無漏などわけがわからない。そもそも私たちは無漏を経験したことがないのですからわからない。「無漏を表象して浄土がありますよ」と言われても、まったく懐かしいとは思えないのです。つまり私たちには本当の在り方はわからないし、一応わかってもそうなれない。しかしそうではあっても「そちらの方が本当である」ということはわかりません。わかるけれどもそうはなれないという根本の矛盾があります。

つまり私たちの心自体が迷いの心ですから、如来の呼びかけである迷わない心と矛盾するのです。どうして私たち

のなかで、迷いの心と迷わない心の二つが成り立つと言えるのでしょうか。私たちが信心を持ったら金剛心であると
言おうとすると、そのような矛盾が起こるのです。

欲生心は回向心なり

ここが難しいところです。私たちは有漏である煩惱の身と、無漏である法蔵願心の純粹清浄の世界とは矛盾するように思います。ですから浄土教の一般的表現では、その矛盾を避けるために、「生きているうちではなく死んでからである」というような説明をしてしまいます。しかし親鸞聖人は、本願の救いをこの現生で、煩惱のただなかで大切にいただくこととされました。大悲にとっては、煩惱具足の凡夫を救いたいですから、この我らにとっての矛盾を、大悲の側から突破して我らの所に救いをもたらしてください、と。

先ほど述べましたが、善導大師の「衆生の貪瞋煩惱の中に、よく清浄願往生の心を生ぜしむる」という言葉を、親鸞聖人は「金剛の信心を獲得するなり」と述べておられま

く、と。

〔聖典〕二二二頁

に対して、『尊号真像銘文』で、

この至心信樂は、すなわち十方の衆生をしてわが眞実なる誓願を信樂すべしとすすめたまえる御ちかいの至心信樂なり。凡夫自力のころにはあらず。「欲生我國」というは、他力の至心信樂のころをもつて、安樂淨土にうまれんとおもえとなり。〔聖典〕五二二頁

と注釈されています。このように「安樂淨土にうまれんとおもえ」ということですから、「欲生心は、至心・信樂とともに如来の願心である」ということです。

しかし本願成就して「かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得」ということになるのは、「私たちの心である」というように解釈しがちです。ところが親鸞聖人はそのようにはおっしゃっていません。例えばその第十八願成就の文、

あらゆる諸有衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く、と。

〔聖典〕二二二頁

に対して親鸞は、『一念多念文意』で

「願生」は、よろずの衆生、本願の報土へうまれんとねがえとなり。〔聖典〕五三三五頁

と註釈されています。こちら「本願の報土へうまれんとねがえ」ということであり、如来の側からの呼びかけであるとされているのです。つまり私たちの心ではないということですから。

また親鸞はこの第十八願成就文を二つに分けています。つまり、

諸有の衆生、その名号を聞きて信心歡喜せんこと、乃

至一念せん、と。〔聖典〕二二八頁

そこまですて切つて、「本願信心の願成就の文」と名づけ、それ以下の、

至心回向したまへり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せんと。唯五逆と誹謗正法とを除く、と。〔聖典〕二二三頁

を「本願の欲生心成就の文」と名づけられます。親鸞聖人はわざわざ本願成就文の後半部分を「本願の欲生心成就の文」と名づけている。これはつまり「欲生心が成就する」ということは、「かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せん」ということが成り立つことなのです。そして「欲生はすなわちこれ回向心なり」（『聖典』二二三頁）と言われ、この欲生心を如来の回向心であるとおっしゃいます。如来の回向が煩惱具足の衆生のところろに成就するとされるのです。先ほど述べました有漏・無漏ということ言えば、有漏の身に無漏が成就するという

ことです。そのような私たちの通常理解と矛盾することを親鸞聖人はおっしゃっている。ところが「その矛盾する事実が本願成就の事実として私たちのうえに成り立つ」、そのことが金剛心であり、それを獲得することなのです。

つまり金剛心は私たちの心のなかに起こるけれども、私たちの心ではないのです。それは、如来の本願が名号を誓っており、その名号のなかに浄土の不可称・不可説・不可思議の功德を具して、衆生に与えようとする心から、信心が発起するからです。私たちは日常の自力意識でそれを信ずることはできない。自力の心では「そのようなものはもらえない」と思っています。

しかし法蔵願心の側は一切の功德を平等に衆生に恵まなければ仏に成らないと誓っている。誓願が名号となって私たちに呼びかけている。回向成就とは、その法蔵願心から一如の功德が衆生に来るのです。和讃で「信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり」（『聖典』四九六頁）と言われ、「信巻」の別序の初めに「信樂を獲得することは、如来選択の願心より発起す」（『聖典』二二〇頁）と言われるように、

信心は願から起こる。願心自身の発起である。法蔵願心が信心として発起するのです。

それが起こる場所は、私たちの煩惱の心のただなかです。

『高僧和讃』にも、

五濁悪世の衆生の 選択本願信すれば

不可称不可説不可思議の 功德は行者の身にみてり

（『聖典』五〇〇頁）

とあって、親鸞聖人は私たちに与えられるはずもない一如の功德が、信心において与えられるとおっしゃっているのです。

本願が煩惱の身に成就する。自力の心しか起こせないような衆生に、「必ずや信心をおこさずにはやまん」と本願力回向がはたらいてくださる。如来の本願が「わが国に生まれんとおもえ」と呼びかけてくださっている、そのことを如来からの勅命であると聞く。それによつてこの愚か得我執の強い自分が翻される。「ああ、そうでしたか」と翻される。その翻された心のもつ質を親鸞は金剛心とおつし

やるのです。

つまり金剛心は自分のつくる心ではないのです。人間は、如来の心であっても、いただいたら「自分の心である」という考えで解釈しようとしませう。そのために矛盾するので。だから「私の心が金剛心なんて絶対言えない」とたちまちに変わります。しかし金剛の心でなければ信心はまったく成り立たないわけです。愚かな者にも如来の本願力回向は、「真実を与えずんばやまん」とはたらいてくださる。そのことを「ああ、そうでしたか」と受け取る。絶対の受け身です。

法蔵願心の呼びかけ

一切衆生に平等に「救わずんばやまん」とはたらき続けるその法蔵願心は、気がつく人にも気がつかない人にも皆に呼びかけています。しかし法蔵願心に気づいた人には法蔵願心があるとわかりますが、気がつかない人には法蔵願心などまったくないのです。気がつかないわけですから。しかし法蔵願心の側は「きつと気づいてくれる」と諦めま

せん。

このような不可称・不可説・不可思議の心はたらき続けてくださっている。その心に照らされる。先ほどの善導の御和讃でいえば「弥陀の心光摂護して」（『聖典』四九六頁）です。弥陀の心の光が照らしてくださるのです。確かに私たちの心は煩惱に覆われ、照らされても暗い。しかし弥陀の心光は、兆載永劫に場所を選ばず、時を嫌わずいつでも照らし続けると表現されます。無量光であり無量寿です。無量寿のなかに私たちは育てられて気づかされて、本当に愚かなままにその心を信ずることができる。信ぜずにおれないという心が起こる。

先ほども言ったように、その心は自分でつくった心ではありません。我執の一角が破られた心です。貪瞋煩惱のただなかに見いだされる白道、四、五寸の道です。四、五寸というのは狭いですが、そこに足を下ろせば選択摂取の大道です。信心が大道です。信心が道の意味を持つわけです。この「道」という言葉から、信心を持つて私たちが歩くところが道だろうと考えるのですが、道は譬喩です。その譬喩が何を表すかという信心を表している。本願力を信ず

る心が起こるとその心が道になる。

またその信ずる心が浄土になる。浄土という場所があるというように執着すると意味がわからなくなります。本願が浄土を莊嚴するわけですから、それは如来の願心が私たちに回向されるということです。そしてその回向された功德を感じる心が莊嚴功德に相応するわけです。

時間を超えて

親鸞聖人が『教行信証』「信巻」の最初に「大信心は」（『聖典』二二一頁）と言って書かれている十二の功德には、教・行・信・証のすべて、教えからさとの証大涅槃までを包むことが述べられています。

これも私たちの分別の心からすると、私たちは煩惱の身と涅槃とは矛盾すると思います。しかしそもそも大乘仏教は、煩惱即菩提、生死即涅槃ということを標識にしたわけですから、これが成り立たなければ大乘仏教とは言えないわけです。しかし私たちがすると、「煩惱の身であるにもかかわらず大涅槃だなんてどうして言えるのか、死んで

からである」ということにするわけです。親鸞聖人でも物語的に、そういう語り方をなさっていることがあります。しかしそれは譬喩的な表現だろうと私はいただいています。つまり人間は時間を生きているし、煩惱の身を生きているが、本願は時間を超えているのです。

仏は一如宝海からかたちを表し、法蔵菩薩と名告なつつて本願を起こしたわけですから、本来は時間を超えたものが法蔵菩薩になっているわけです。しかし私たちにとっては、五劫に思惟したり、十劫の昔に正覚を取ったり、兆載永劫に修行して法蔵菩薩が阿弥陀に成った、というように言われても困惑します。修行しながら覚りを開いているなんて矛盾しています。しかし仏はもともと一如宝海であり、時間を超えているわけですから、そのような表現でもいいわけです。阿弥陀如来は成仏している。しかし菩薩の修行をせずにはおれない。愚かな私たちがいるからです。愚かな私たちがいるから呼びかけてくださる。

法蔵菩薩が阿弥陀に成ったと言いましたが、法蔵菩薩は阿弥陀から現れたとも言えるのです。私たちの因果論ではよくわからない話ですが、これはつまり果から現れた因な

のです。従果向因です。さらにいえば因であつて果でもある。果のままに因であるということ。それは一如宝海の功德を衆生に与えるためです。それを通して私たちは本當に窮屈な狭い心が、広大な方向に開かれる、自力の心が破られるのです。先ほどの善導大師の御和讃でいえば「煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば すなわち穢身すてはてて」ということです。それは金剛堅固の信心です。この「煩惱具足と信知する」ということと、「金剛心が成就する」ということとは一念同時です。私たちは「煩惱がある」と反省したりしますが、この「煩惱具足と信知する」とは「自分に起こるころは煩惱以外にない」ということを嫌というほど知らされるといふことです。「少しましな心になれる」と思っているうちは信知ではないのです。そのような、信知するということが起こるといふことは、自力でどうかしようという心ではないので壊れることはありません。

不滅

浄土教にみられる物語的あるいは譬喩的な表現については、いのちであるものが必ず滅びます。ですから「無量寿であるとしても終わりがあるだろう」という議論になるのですが、善導大師も、阿弥陀如来もこの世から消えることがあるか、というような議論をされています。しかしそれは譬喩的な表現であり、実体化されたいのちです。

しかし親鸞聖人がおっしゃるように「みだ仏は、自然のようをしらせんりょうなり」（『聖典』六〇二頁）ということなのです。つまり本願力に帰することにおいて、自然に浄土が開けてくる。これは教えとして、私たちの知見の及ぶ範囲を超えて、如来の側からはたらきかけてくる世界があるということです。それが大道です。

それに対して私たちがどうにかしようという心は、小さい道であり成就しません。それにもかかわらず私たちは限りなく何とかしようと努力し続けます。努力することが悪

いわけではないのですが、努力に付随する妄念、「どうにかなる」あるいは「自分が肯定される」というような思いがあるわけです。本願の教えはそういうことが間違っているということを知らせようと衆生に呼びかけている。それに気づくと、気づいた内容である真理は滅びない。その信じた内容である本願は滅びない。一如宝海が滅びないのと同じように滅びない。現象として起こる意識は滅びますが、滅びないものを信じた心は大信海ですから滅びないのです。

曇鸞大師は自分の身を長生きさせようとしたが、「何のために妄念のいのちを長らえるのか」と菩提流支三蔵に怒られて、その場で「仙経」を焼き捨てました。そして浄土に帰した。「浄土にふかく帰せしめき」（『聖典』四九一頁）とありますが、浄土に帰したことによって無量寿のいのちに触れた。そのとき一瞬一瞬が無量寿のいのちの意味をもつのです。

信ずるということ

私たちは自分の心のなかに起こる心を意識できませんが、

それは相対的な認識でしかありません。唯識の思想では「意識する作用」と「意識される内容」が意識であり、それを「見分」と「相分」と言います。普通の唯識ではそうですがさらに、「それを知っている心」があるということ、唯識三分説が出てきます。例えば今、私は皆さんを見ているわけですが、自分がここにおいて、自分が意識しており、そして意識されている皆さん方がおられると知っている。さらにそのような意識が起こっていることを知っている作用があるということです。

それに合わせるなら、如来の本願が見分だとすれば、衆生を相分として「衆生を救わずんばやまん」というかたちで本願が起こる。あるいは願心が見分だとすれば、願心の相分が浄土や浄土の人天です。浄土は法蔵願心が生み出した世界だからです。しかしそれを誰が知るのかというと、それは凡夫が知るわけです。

しかし如来の生み出した世界を凡夫の心で真に知ることができないはずがないので、やはり凡夫の心で知ることとでもない。第十八願成就文の「かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得」ということも、私たち凡夫が体

験するのではない。衆生のうちに立ち上がった法蔵願心が体験するのです。往生浄土を空間的に違う世界に行くように考えると「現生は穢土であるから浄土は来ない」ということになります。しかしその穢土に本願力がはたらくのです。「不退転に住せん」とは現生の利益ですし、わざわざ本願力回向を言うのは、回向心が凡夫にはたらくからです。その回向心が欲生心を成就するのです。それを金剛心と言います。

阿弥陀の心

私たちは自分の闇を自分で照らすことはできません。阿弥陀の心光が照らす。如来の本願力に出遇うと闇が照らされる。「一一の光明あまね遍く十方世界を照らす。念仏の衆生を撰取して捨てたまわず」（『聖典』一〇五頁）です。阿弥陀という意味は、あらゆる世界を照らしているということでもあります。つまり如来は私たちを平等に照らしている。しかし自力の妄念や煩惱の黒業で覆っているので私たちは光を見ない。光を見ないものにとっては、如来の心光がはた

らいていても見えない。物質的光と違って心光です。心の光は心が開かれなないと気づくことができない。気づいたらそれは阿弥陀の心である。阿弥陀の心は金剛です。ですから私たちとは矛盾しますが、私たちに金剛心が与えられるのです。その心だけが成仏すると親鸞聖人はあえておっしゃる。法蔵願心が「成仏せずんばやまん」と誓い続けるから、「その願心が成仏せずんばやまんとはたらいてくださる」ということを信ずればよいのであって、凡夫が仏に成ることは如来の仕事ですからおまかせする。そもそも仏に成ろうと思っても成れないのだから、もうおまかせするしかない。それが金剛心であるということです。有漏の凡夫に無漏が来るといふことです。それを成就しなければ本願成就は成り立たない。私たちはそれをいただいて生きるのです。

現生は愚かな罪濁の凡夫であっても、本願を信ずることにおいて、「本願を信ずる衆生は諸仏と等しい、弥勒と同じである」と親鸞聖人はおっしゃる。愚かな凡夫だから駄目だとは言わずに、愚かな凡夫が本願を信ずれば、その本願を信ずる心が、もう仏法そのものなのです。これがこの

世にあつて何よりも大きな意味をもちます。愚かな凡夫が信ずるところに本願が証明されるのです。愚かな凡夫がいなかったら、願ははたらきようがありません。ですから愚かな凡夫こそ尊いと、我ら凡夫の意味が転ぜられるのです。親鸞聖人は、私たちの愚かな心のままにこのようなことが言えることを、金剛心を獲得すると言うことができる、と教えてくださっているのではないかと思います。